

第2回セミナー かたつてまちづくり みよう!

@熊本日日新聞社・本館2階ホール

「くまにち すばいす」で隔週掲載中の「まちづくり探検隊」。その紙面を通じて地域活動やまちづくりに興味・関心を持った方に、実際の行動に移してもらうための後押しとなるよう開催しているセミナーが、「かたつてみよう! まちづくり」です。第2回のセミナーで行われた事例発表やワークショップの様子を紹介します。



事例発表、ハザードマップ作りと盛りだくさんの内容に参加者の満足度も大!



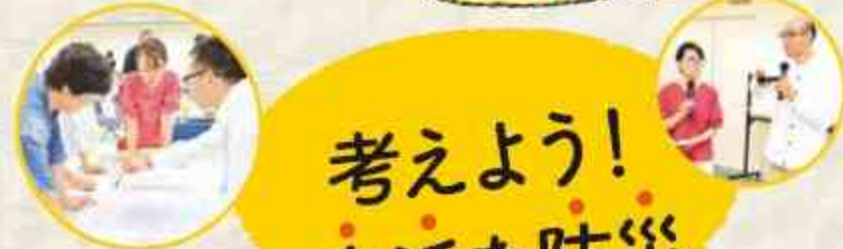
市が作成したハザードマップを基に危険なエリアをチェック

私たちが参加者の意識の高さにびっくり!

ハザードマップの重要性が参加者に浸透!

事例発表で熊本地震の際の避難の現実を聞き、薄れつつあった被災当時の記憶を呼び戻すことができました。また、改めて災害への備えの大切さを痛感しました。セミナーでは、参加者から「30~40代の働き盛りや子育て世代の防災意識が低いのでは?」との意見もあり、同世代である私も含め、意識改革の必要性を感じました。災害への具体的な備えや準備を行う上で、ハザードマップ作りがその第一歩になるとの気づきを得た参加者が多かったようです。

司会 荒木直美さん
(タレント、まちづくりコーディネーター)



考えよう!
身近な防災

9 月9日、熊本日日新聞社・本館2階ホールで開催したセミナー「かたつてみよう! まちづくり」。

今回のセミナーは、「考えよう! 身近な防災」のテーマに約20人の参加がありました。熊本地震という大災害を経験し、誰もが災害への備えの大切さを痛感しました。しかし、いざ「何かしなければ」と思っても、どのような準備や心構えをすればいいのか「分からない」という人も少なくありません。

そこでセミナーでは、今回から3回シリーズで、身近な防災を考える上で欠かせない要素の一つ「ハザードマップ」を作り、それをどう生かすかを学ぶことにしました。

2部制で地域防災の事例とハザードマップ作りを学ぶ

今回は、2部に分けて展開。第1部は、託麻原小PTA会長の漆野和也さんと、熊本市消防団(慶徳校区)・第15分団の山内要さんによる事例発表を行いました。地域で取り組んでいる防災活動の実例や、熊本地震の教訓を生かした防災のアドバイスなど興味深い話題に、参加者はメモを取りながら聞き入っていました。

さらに、セミナーの講師・ファシリテーターを務める水野直樹さんを交えたフリーディスカッションでも熱い意見が交わされ、事例発表と併せて、改めて「防災」

への意識を高めるきっかけやヒントを得る機会になったようでした。

第2部のワークショップでは、テーマの柱であるハザードマップの重要性と、その作り方について水野さんが説明。「ハザードマップを見るのも、作るのも初めて」という参加者が多く、次回予定しているフィールドワーク(実際に地域を巡りハザードマップに落とし込む危険箇所を調べる)に向けて、いい予行演習になったようです。

災害の経験者だからこそできる防災対策を!

私たちは2年半前に熊本地震を経験しました。だからこそ、万一の災害に備えて「想像できること」「考えること」「提案すること」があります。今回のセミナーでは、さまざまな立場からのお話(事例発表)と参加者の皆さんの経験を重ね合わせて考えることで、未来への行動が見えてきたのではないのでしょうか。考え付かなかった視点を与えられ、新たな気づきに目を向けることが、私たち「経験者」にできる防災対策だと思います。

講師・ファシリテーター 水野直樹さん
(スタディライフ熊本理事)



地域に潜む危険を“見える化”



「ハザードマップ」って何？

ハザードマップは、自然災害による被害の軽減や防災対策に使用する目的で、被災想定区域や避難場所・避難経路などの防災関係施設の位置などを示した地図

ハザードマップの作り方を学ぼう！

Let's learn how to make a hazard map!

第1 部では、普段は分からない危険箇所を、見える化するための必須アイテムともいえるハザードマップの作り方を学びました。実際に熊本市中心市街地の地図を用意し、その上に透明シートを貼り付け、「水害の際に浸水するエリア」「避難場所になりそうな場所」などをマジックで塗り分けながら確認していきます。日頃、何気なく歩いたり、車を通ったりしている道が浸水の可能性が高いと知り、参加者も驚きを隠さない様子でした。

講師の水野さんは、「地震、水害など、起こる災害によっても危険箇所や避難場所、避難経路は変わる。またさまざまな状況を想定し、地域や家庭で独自のハザードマップを作ることが災害への備えの第一歩につながります」と強調。この日は、親子での参加もあり、「わが家でもハザードマップを作ってみよう」「避難場所を決めておかないといけない」など、それぞれに話し合う姿も見られました。今回学んだ作り方を生かし、次回の実践編でどのようなハザードマップが出来るのか楽しみです！

災害の種類によっても異なる危険箇所あらゆる状況を想定して作成を



災害時の危険箇所や被害を“見える化”することの重要性を伝える水野さん

子どもたちも真剣な表情で取り組んでいました

事前勉強会を行った山内さんや渡辺さんもハザードマップ制作のアドバイザーとして参加

ハザードマップを見ながら自分の住む地域の危険箇所をチェックする親子

セミナー参加者の感想

“自分ごと”として考え、家族で意識を高めたい

大雨などで浸水する可能性の高い地域に住んでいるため、日頃から気になっていました。災害への備えを“自分ごと”として考え、学んだ防災のノウハウを地域に伝えたいと思い参加しました。ハザードマップ作りでは、災害の起こる時間帯や逃げ遅れの動線などで考える必要があるなど、多くのことに気付かされました。家に帰って、非常時の家族の避難場所なども改めて話し合います。

小原白輝子さん
しゅうさん



「学び」を行動に移し、伝えていくことが大事

これまでネットなどでハザードマップを見たことはありましたが、どういふものかは理解していませんでした。今回、自身で作ることで、地域に潜む危険箇所について改めて考える機会になりました。同時に、災害への不安や恐怖を感じることで、備えの大切さも痛感し、意識が高まったような気がします。将来は防災士の資格を取り、学んだことを多くの人に伝えていきたいです。

渡辺剛一さん



目標を定めて学び、今後に生かしたい

管理栄養士としており、非常時の行動はこれまででも学んできました。しかし、熊本地震を経験し、また父を自宅で介護していることもあり、市民としての知識も学ぶ必要があると思い参加しました。ハザードマップのワークショップの際、山内さんが過去の災害と重ね合わせて説明してくださったのが、とても心に落ちました。自分だけの知識にしておくのはもったいないので、ぜひ地域に戻って役立てようと思います。

松下みゆきさん



まちづくり探検隊・読者アンケート

「まちづくり探検隊」を読んで感じた、まちづくりや地域活動への興味・関心や、あなたが参加したい活動などを教えてください！



① あなたは普段、まちづくりや地域活動について関心がありますか？ (○は1つだけ)
1. とても関心がある 2. やや関心がある 3. あまり関心がない 4. まったく関心がない

② ①で「または2と答えた方」どんな活動に関心がありますか？ (○はいくつでも)
1. 清掃 2. まちなみ保全 3. 子育て 4. 青少年育成 5. 教育 6. 文化
7. スポーツ 8. 防災 9. 防犯 10. 高齢者福祉 11. 健康増進 12. 環境美化
13. 緑化 14. 観光 15. まちおこし 16. その他()

③ まちづくりや地域活動に参加したことがある、または参加していますか？
1. 参加したことがある (している) 2. 参加したことがない

④ ③で「参加したことがある (している) と答えた方」それはどんな活動ですか？

⑤ ③で「参加したことがない」と答えた方」その理由を教えてください。

⑥ 将来、まちづくりや地域活動に参加したいですか？

(現在参加している方は今後参加したいですか？) (○は1つだけ)
1. 参加したい 2. どちらとも言いえない 3. 参加したくない

⑦ ⑥で「参加したい」と答えた方」それはどんな活動ですか？ (○はいくつでも)
1. 清掃 2. まちなみ保全 3. 子育て 4. 青少年育成 5. 教育 6. 文化
7. スポーツ 8. 防災 9. 防犯 10. 高齢者福祉 11. 健康増進 12. 環境美化
13. 緑化 14. 観光 15. まちおこし 16. その他()

⑧ 「くまにちずいず」に添読で掲載している「まちづくり探検隊」を読んだことがありますか？
1. 読んだことがあります 2. 読んだことがない

⑨ ⑧で「読んだことがあります」と答えた方」記事に載っている特集はありますか？ (○はいくつでも)
1. 「は津波の自然と水を守る会」の活動体験 2. 「海上校区ウォーク・ボーイズ」の取材
3. こども会の活動の取材 4. 消防団の活動体験
5. 校区自治協議会・町内自治会の活動の取材 6. 校区防犯パトロールの活動体験
7. 「川尻精進流」の活動の取材 8. 第1回セミナー開催 9. 防災キャンプの活動体験
10. 総合型地域スポーツクラブの活動の取材 11. 民生委員・児童委員の活動の取材
12. 「熊本市校区自治協議会会長・上田美奈子さん」の取材 13. どれでもない

⑩ ⑧で読んだことがあると答えた方」「まちづくり探検隊」の紙面を
読んだ後を比べてみて、まちづくりや地域活動に対するあなたの自身の意識や行動に、
次に挙げのような変化はありましたか？ (○はいくつでも)
<地域活動に参加したことがあった方>
1. さらに興味・関心が高まった 2. さらに参加意欲が高まった
3. 参加する活動の数(または頻度)が増えた
4. 変化なし 5. その他()
<地域活動に参加したことがなかった方>
6. 興味・関心が高まった 7. 参加意欲が高まった 8. 実際に地域活動に参加した
9. 変化なし 10. その他()

⑪ あなたの年代と性別を教えてください。

<年代> 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上

<性別> 男性 女性

アンケートに応募いただいた方の中から抽選で30名に粗品を進呈

応募方法

アンケート項目の回答のほか、氏名、郵便番号、住所、年齢、電話番号、メールアドレスをご記入の上、下記の要項でお送りください。

応募対象

熊本市に在住または通勤、通学する20歳以上の男女

はがき

〒860-8506 ※住所は不要です
熊本日日新聞社 業務推進同営業企画部
「かたつてみようまちづくり」セミナー係
※個人情報は連絡のみに使用します

FAX

096(372)8711

ぜひHPなまフォーム

右記のQRコードから飛べます

締め切り
11/9(金)



ハザードマップは防災の第一歩

地域での防災の取り組み ～事例発表～

事例発表①

将来は地域の防災を担う人材に

託麻原小学校PTA会長 漆野和也さん



最初の事例は、託麻原小(中央区)で7月21日・22日の2日間にわたって行われた「防災キャンプ」について、同小PTA会長で現役消防士でもある漆野和也さんが発表しました。

キャンプは、小学校の教室やプールを使って行い、5～6年生43人が参加しました。目的は、「防災の知識や情報を学び、子どもたちが自分で身を守るようになること」「集団生活を通して自助・共助の大切さを知り、将来の地域防災を担う人材の育成の2つです」。

はじめに、児童一人に2リットルの水を配布。これは、私たちが1日に必要とする水が2～3リットルといわれているからです。その後は、心肺蘇生法

をはじめ、AEDの取り扱い、応急処置の作成、着衣水泳、災害図上学習(DIG)、非常食の調理など、実践的な防災知識を伝えました。

子どもたちの成長が大人たちの刺激になれば

2日目はラジオ体操でスタート。朝食後に、水消火器の取り扱い、地震車体験、緊急車両の展示などを行いました。子どもたちからは、「大人に言われなくても自分で考えて行動できるようにになりたい」「助けられる人から「助ける人」になりたい」など、頼もしい感想が聞かれました。こうした子どもたちの成長を見て、大人の防災意識も上げられればいいですね。

事例発表②

「想定」を捨てて、非常時の備えを

熊本市消防局(東徳校区)第15分団 山内要さん



タレント活動の傍ら、地元・東徳校区の消防団員という顔も持つ山内要さん。熊本地震の際に避難所運営に携わった経験を基に、3つのアドバイスをくれました。

まずは、「自己完結できる備え」が大事です。自宅が被災を免れた場合、非常時の備えがあれば避難所に行かずに済みます。もし自宅でも過剰は、3日分の食料に加え、お菓子やアルコール、たばこといった嗜好品(嗜好品も準備しておくこと)もいでしょう。嗜好品を愛しむ時間があると日常を取り戻すことができ、不安軽減にもつながります。

次に簡易トイレです。非常時でも排泄は不可欠。災害で断水な

自分の目で確認して
より実用的な
ハザードマップを

どが起こると、排泄物の処理もままならず不衛生になりがちです。そんなとき、市販の簡易トイレがあると役立ちます。

最後は、日頃から安全な場所を探し、避難所を2つ決めておくこと。万一、家族がバラバラになっても、「どちらかにいる」と安心して不安も和らぎます。

非常時にはたくさんの想定外のことが起こります。地域を自分の目で確認し、より実用的なハザードマップを作っておくことが、災害時の不安解消につながります。



写真を使って、キャンプの様子を分かりやすく説明する漆野和也さん



お祭り形式のPTA主催の防災キャンプの事例発表に秋田県七尾市長の



実際に基づく山内さんの発表やアドバイスを聞きながらメモを取る参加者

フリーディスカッション

熊本地震の経験生かし “深み”のあるハザードマップを

「忘れない」「避けたい」……課題も多い
地震後の防災意識

フリーディスカッションではまず、熊本地震から2年半が経過し、市民の防災意識がどう変化しているのかについて意見が交わされました。課題として挙げられたのは、「地震の記憶を忘れない」「避けたい」と考える方々への防災意識の植え付け(山内さん)や、「仕事や家庭が忙しい30～40代の防災意識を高める必要性(漆野さん)など。

地域の防災意識を高める上で大切なこととして漆野さんが強調したのは、日頃からの「つながりづくり」。「災害に強い地域は行事などを通じて顔見知りが多く、非常時も連携が取りやすい」と説明しました。一方で、都市部や市街地では一人暮らしが増え、そうした連携が難しい地域もあります。山内さんが暮らす東徳校区でも、地震発生後の避難誘導の際、独居の高齢者の中には「避難所へは行かず自宅に残る」という人も少なくなかったとか。

地域の実情に即した
ハザードマップが
自助・共助につながる

続けて話題は、ハザードマップ作りに移りました。「行政が作成する一般的なハザードマップは、洪水や土砂災害などの際の危険箇所を示した幾時的なもの。熊本市では、町内自治体単位でのハザードマップ作成を進めています。地域で生かすには、より地域に即した目線で作ることが大事」と漆野さん。水野さんも、「大きな災害を経験している私たちだからこそ、さまざまな災害や状況を想定した深みのあるハザードマップが作れるのでは」と、参加者に呼びかけました。



予定の時間をオーバーするほど白熱したフリーディスカッション。3人それぞれの思いが参加者の防災意識向上につながりました

フリーディスカッションのポイント!

忙しい30～40代の
防災意識を高める必要性

「あんな大きな地震はもう来ない」
は思い込み

防災の担い手として、子どもとも連携を
災害の経験を基にオリジナルの
ハザードマップ作りを